研究

山陽道探究 ～富田篇2～

会員　西村修一

山陽道道しるべ追考

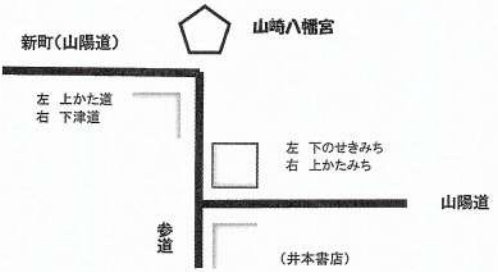
前稿で、太田南畝（蜀山人。一七四九～一八二三）が『小春紀行』に記し、山崎八幡宮前で見たという「左　上かた道／右　下津道」の石標は現存しておらず、かつて山陽道と山崎八幡宮が合流するコーナーに存在していたが（今の井本書店前辺りを推定）、風化したため、現在はその向かいに建てられた新しい石標（「左　下せきみち／右　上かたみち」）に替わったと推測した。

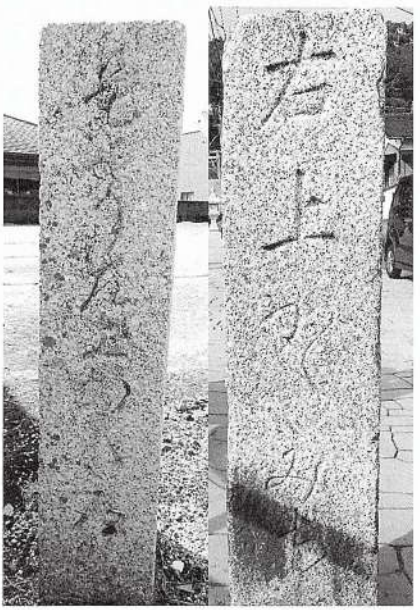
文化二年（一八〇五）に確実に山崎八幡宮前に存在していたはずの石標は、新町通（新山陽道。江戸時代前半は富田津経由）と山崎八幡宮参道の交差点南西角にも推定される可能性にも言及するべきである。最近では、むしろこちらの方が妥当かと思っている。（簡略地図参照）

大坂方面山陽道と山崎八幡宮参道のT字路北東角にある現存する石標「左　下せきみち／右　上かたみち」と、同じく現存する富田政所（まどころ）の山陽道と鹿野（かの）街道のT字路突き当りにあったと推定できる（現在、永源山南口駐車場に再興）「是より左　上かた道／是より右　下せき道」の字面を比較すると、山崎八幡宮参道のほうがシンプルで分りやすい。鹿野街道のほうは文章も凝って、しかも流麗な筆致である。インテリ感がある。どなたに聞いても、後者は地元の名士かお寺の住職さんに書いても

らったのではなかろうかという意見が多い。それを石屋が彫るわけだが、事実は遠からずだと思っている。つまり、後者の方が時代が後のような感じがする。個人的には、私はパッと見に分かりやすい山崎八幡宮参道の道標のほうが素朴で好きである。これが通行人にとって一番だと思う。後者は通行人目線ではなく、文人としての側面が出ているように思う。

前稿において、御殿地（ごてんち）公園にある大きな燈籠は富田御殿の庭園にあったとされる燈籠の台石を意識したディスプレイかと疑ったが、同町在住の吉鶴猛元市議さんより福川にあったディスプレイを県が移転してきたものという証言を得た。この通りには県の管轄の公園が三つ（御殿地公園、水分け公園、さくら坂公園）ある。





山崎八幡宮前道標（右）
鹿野街道政所道標（左）

政所の寺社

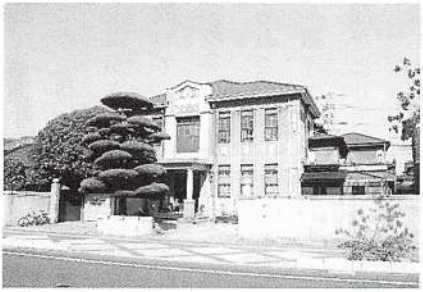
有馬喜惣太の『御国廻行程記』（一七六四年頃）を見ると、鹿野街道の西域の永源山麓と山陽道の間に「真宗東坊」「真宗（法喜山）大安寺」「真宗（清雲山）真覚寺」「真宗（政所山）善宗寺」、「禅宗（鹿苑山）花厳寺」「禅宗（潮音山）南湘院」と寺院が集中し、さらに富田津の近いところに「時宗（錦城山）勝栄寺」、陶氏の城砦があった七尾山（古城山）の麓と神代川の間に「観音」と「禅宗（富田山）建咲院」がある。

善宗寺の本尊である阿弥陀如来立像は恵心僧都の作と伝わり、周防国一円及び長門国の十二寺、合わせて百三十余の末寺を擁する「県内の巨刹であり、寺運愈々盛んなり」（寺伝）の大寺であった。昭和三年に鹿野線の道路ができたために現在は寺域を変えている。大安寺も鹿野線ができたときに、善宗寺の塔頭寺であった真覚寺も昭和三十四年の県道の拡張、四十九年の都市計画を経て、それぞれ現住所に移転しているが、共に政所に現存する。花厳寺は替わらず「華厳寺」として存在する。南湘院は明治七年に徳佐（山口市）の寺院が山号を継承した。徳佐まで写真を撮りに行ってきた。

私にとって、善宗寺と言えば、十六世の香川葆晃を想起する。平成二十一年十二月五日、徳山地方郷土史研究会と新南陽郷土史会の共催である「防長の五傑僧と大谷探検隊」（さくらホール）が催された。長門ではなく周防に、幕末・明治期、明治政府と競うように近代化を進め、革命を起こしての日本の仏教界を救った郷里の僧侶の一群があった。吉田松陰と松下村塾に対称するように、海防論を説き草莽崛起を提唱した月性。薫陶を受けた大洲鉄然は四境戦争の大島口の戦いで島民を挙げて幕府軍と戦った。さらに徳山の赤松連城や島地の島地黙雷らと共に本願寺を改革してゆく。明治新政府の神道国教化政策（廃仏毀釈）も相まって日本仏教界は瀕死の状態だった。欧州やエルサレムを見た黙雷は政教分離をおし進めた。鉄然は本願寺の執行に就き、香川は大学林（のちの龍谷大学）の綜理になって改革に邁進した。開催に先立ち、前年に新南陽郷土史会会長（当時）の徳応丸康夫さ

山陽道沿いに移った大安寺

「御国廻行程記」政所界隈



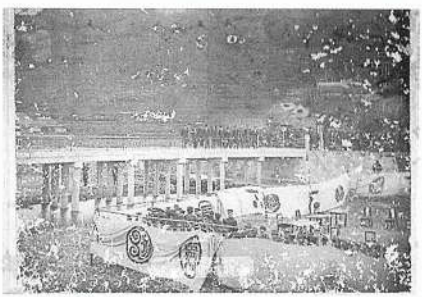
日下医院

南湘院（徳佐）

川崎橋東詰石燈籠

建咲院参道と石灯籠雙

建咲院門前の石製太鼓橋



音羽橋開橋式（大正三年）

んと福山にある広島県立博物館で講演中の白洲浄真広島大学大学院教授を講演依頼のために訪ねた。大谷探検隊を入れて、六つの合同研究チームが立ち上がり、発表を念頭に大分や京都に取材版は散っていった。なつかしい思い出である。楽しい思い出であった。徳応丸さんが「西本願寺は周防に足を向けて寝られない」と言っておられたのを印象深く思い出す。西本願寺の記者さんが山口まで取材に来られたのだが、支部だよりより記事が小さかったのには閉口した。

鹿野街道の町並み

大安寺の住職が「旧地は今の鹿野街道の日下医院辺りでしょうか」と話されていた。日下医院はレトロな洋館で、外観を残しつつ平成十九年におしゃれなカフェや雑貨屋・花屋に生まれ変わっており、雑誌でもよく取り上げられる。長崎で医学を学んだ日下宗一医師が、洋風建築の影響を受けて、昭和三年に築造したものだ。昭和四十九年まで開業された。本館と正門・塀・別館が統一的な意匠で一体的な景観をなしており、正面の三角飾り（ペディメント風）、壁には柱型デザイン、また幾何学的な装飾（セレッション風）もあり、屋根にも意匠が凝らされている。平成二十年に国登録有形文化財（国土の歴史的景観に寄与しているもの）に登録された。

鹿野街道（土井地区）の古い商屋や妻入り町屋は雰囲気があり、写真を撮るならこの辺りがお薦めである。「ふるさと周南景観特選」の地域遺産に指定されている。文政六年（一八二三）に創業した中島屋（なかしまや）酒造場、同じく中島屋（醤油。大正末操業～平成五年）、建咲院の元総代の和泉屋（山﨑家）や藤井宅などの町屋の白壁の商標のレリーフや鏝絵を見るのは楽しい。中島屋酒造の「中」＋カギの商標はカネナカと読んで、同名の銘柄も販売されている。酒の神を祀った松尾神社は京都から分祀したものである。

和泉屋の角からまっすぐ建咲院への参道が延びる。壁脇に石灯籠が二つ並んでいた。山﨑さんに聞くと、山﨑八幡宮の石燈籠とのこと。参道をさらに延長すると、富田川に降りる石段に通じていることに気づいた。川崎橋

の東詰に「荘寺八幡宮」と彫られた大きな常夜灯を思い出した。同じように船着き場として山﨑八幡宮への案内の役割をなしていたものと思われる。共に水上交通や交通の要衝（山陽道・鹿野街道）が意識されたものだろう。

川崎には有名な「おとわ」という孝行娘の話が伝わっている。小さい頃から、雨の日も風の日も渡し場の見張りなど親の仕事を手伝ったおとわは、お殿様にもたびたび誉められた。それで里の人々は、観音様にあるあの大きな松を「おとわの松」と呼び、奥の滝を「おとわの滝」と呼んだ。また川崎川に橋がかかれば「おとわ橋」と名付けた。孝女おとわの名は今日まで語り継がれているのだが、氏子の方に聞いても、おとわの子孫が見つからない。渡し守が稼業のようで、ほかの場所に移っていったのかもしれない。およね、おまさの例からすると、名前部分は「とわ」であり、「音羽」は当て字だろう。

建咲院の山門の前に用をなさない石橋が横たわっている。明治時代のエッチングを見ると、小川が流れているので、かつての残骸であろう。ディスプレイとして使われているのだろう。エッチングでは太鼓橋が架かっている（明治時代）のだが、それとは違うようだ。

建咲院への道すがら、国登録有形文化財の茅葺き屋根の四熊家がある。屋根を葺き替えるのに、茅葺き職人十人で二週間かかったと平成二十五年の記事にある。ここには「雨乞いの面」という不思議な面の伝説が伝わっている。

元禄の頃のある晴れた日、四熊村の百姓が蕎麦畑で働いていると、天がにわかにかき曇り、一筋の強い光がさすと、大きな雷響がして雲が立ち込めた。百姓が雲中に何かを見つけ近づくと、光明があって、そこには二つのお面が残されていた。面を持ち帰り、百姓は床の間に祀ったが、夜中にゴロッゴロッと大きな音が一晩中なり響いた。酒を供えると、お面さまは満面真っ赤になって、ますます踊り狂った。お殿様に相談して、その地の医者である四熊家で祀ることになり、お面を納める立派な日紋入りの葛篭を作り、社も建立して祀った。ひでりの年には、四熊家から徳山の毛利様にお願いして、みんなで

四熊嶽の頂上に登り、祠の前で面の箱を開けると、にわかに雨雲が空いっぱいに広がり、雨が降ってきたという。〔「周防小富士ななはた」ななはた探訪会〕

四熊家には面が十九伝わり、天から降ってきたといわれる面が二つ、昔から伝わってきた面が十六、新しく得られた面が一つ納められているという。四熊家の当主に中庭に案内され、小高い所に鳥居のある社を示された。社の中に大内菱の家紋の入った箱が納められていた。中庭には立派な池があるのだが、枯れている。「かつては変わらぬ水位が保たれていたが、バイパス（現国道2号線）ができ枯れた」と話された。

永源山界隈の文化財

政所の道源家の向かいに道源銀行があった。絵葉書で見ると、当時としては洋風のモダンな建築である。この建物はのちの新町の富田郵便局に継承された。現在は解体されたが、その痕跡を郵便局長さん宅の玄関に見つけた。銀行の玄関にあった柱の上部の耳のような飾りが今は玄関脇で趣向が凝らされている。局長さんに庭で他にも残った石材を見せてもらった。

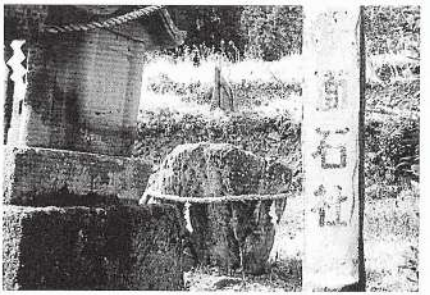
華厳寺（曹洞宗、康暦元年（一三七九）創建）の裏山にある昭和四年の秩父宮殿下の第五師団秋季演習参加の「登臨記念碑」に住職に案内してもらった。これに興味を持ったのは、周南市新南陽民俗資料展示室に福川の資産家であった柏屋（かしわや）の寄贈として、昭和四年の第五師団秋季演習参加の秩父宮殿下の宿泊用に用意された檜の桶風呂が展示してあったのと（結局はお泊りにならなかった）、山陽道沿いの富海の入江酒造に、秩父宮殿下の御仮泊の記念碑を見つけたからである。

「防長新聞」昭和四年十一月の記事、「馬開毎日新聞」昭和四年十一月記事によって、秩父宮殿下が昭和四年の第五師団秋季演習参加時の足取りが分かる。

昭和四年十一月八日　米川　木村宇一宅　「御宿営碑」

十一月九日　柳井　神田吉松宅　「御假泊之跡碑」（侍従武官長奈良武次謹書）

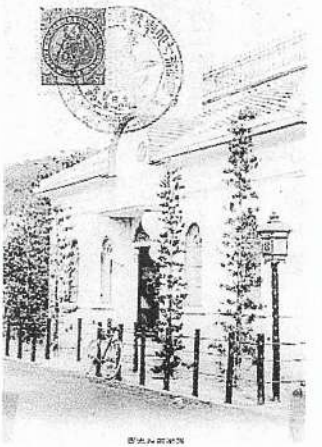
十一月十日、十一日　光戸仲　海田岩助宅「御仮泊記念碑」（原口初太郎書）



面が降りてきたという奥四熊

四熊家庭園と面社

道源銀行の一部を発見



道源銀行

富海入江家の秩父宮宿泊記念碑

秩父宮登臨記念碑

平野松坂家伝由来書

十一月十二日　富田青木利助宅
十一月十三日　富海　入江幾太郎宅　「御仮泊之地碑」（元帥伯爵東郷平八郎書）
十一月二十日　小郡より御帰京

以上は、下松の吉本典克氏の協力を頂いた。

平野

平野は「富田瓦」の製作所が密集する。江戸時代の徳山藩の御用瓦や寺社の需要から始まり、明治時代後半には朝鮮半島まで販路を広げた。昭和の初期頃が全盛期で、窯は四十軒近くに増えた。昭和四〇年代に入って需要が少なくなり、また良い粘土取れなくなって、後継者も工場へ流れた。昭和五十年に入ってついに平野の窯の火が落ちた。『民俗文化』第二四号（近畿大学民俗学研究所）所有「富田瓦について」の論稿がありますので、そちらを読んで下さい。周南地域の図書館に配布してあります。

平野の松坂家に太閤殿下がご休憩になったという伝承が伝わる。太閤秀吉公は喉が渇き、温田の東の辺の大きな松のある八右衛門のところで休息した。八右衛門がうやうやしくお湯を差し出すと、気分を良くした秀吉が一句を進ぜたという。「からたちの木の実はとんだ　枳殻かな」と詠まれ、「以後、松坂と名乗るがよいぞ」とお褒めの言葉と姓を頂いた。（『新南陽市の民話と伝説』新南陽市教育委員会　昭和四十八年「松坂八右衛門」）

松坂家にこの由来書が今に伝わる。現当主の利太さんに見せてもらった。

一　私家名松坂ト名乗其由来

太閤様、朝鮮征伐御下向ノ時分、私背戸方松有テ坂少シ有之　御小休ニ被遊候時、八左衛門枳殻ヲ献上仕候所御意ニ入　から立の其のみ者とんで　き古く可那

御書下松坂八左衛門下置

歌は「からたちの　その実は飛んで　枳殻かな」となろう。からたち（ミカン科の落葉低木）の別名が枳殻である。推測するに、「（韓）立ちの　その身は飛んで（富田）枳殻（帰国）かな」と掛け言葉が存在すると鑑賞した。

富田は面白いと感じた。